

丹後地域にみる布留式甕と前期古墳 の分布について

杉原和雄

1 はじめに

いわゆる布留式土器と呼ばれている一群の土器は口縁端部の内面が肥厚し、体部は球形で丸底をなす甕と小型三種の土器(丸底壺、器台、鉢)がその特色とされている。この土器群については、成立の問題、編年の問題等、畿内の資料を中心に活発に論議されているが、なお研究者の一致した見解はないのが現状である。しかし、布留式土器の成立とその広大な分布状況の持つ意味は、庄内式土器とともに、古墳発生問題ともかかわって、誰もが注目しているところである。本小稿は、畿内周辺部に位置するとはいえ、4世紀後半から5世紀前半、とくに西暦400年前後に大型古墳をつぎつぎに造営した丹後地域における布留式甕形土器の分布とその意味について考えるものである。

2 丹後地域の布留式甕の分布

第1表は、現在知られている布留式甕の一覧である。この表には、小型三種は含めていないので、布留式土器全般を語っていることにはならない点が要注意であるが、ここでは単純に甕だけを取りあげることとした。表中、27例のうち、21例が集落跡、6例が古墳出土である。各遺跡からの出土数の多少は、数点以内の出土を「少」とし、それ以上を「多」としたが、「多」としたものであっても、その遺跡の主流を占める甕は、布留式以外のものであることは注意される。14裏陰、19古殿、23林の3例以外は、「多」「少」の表現にかかわらず散見される程度の量というべき実態である。古墳からの出土はもともと限られているが、その出土数を、数字で表した。集落跡出土の甕は一般に言われている古・中・新相の三期に仮に相応させれば、2桑飼上、16アバタ、27クズレなど明らかに須恵器を伴う新相のものがあ、また、他の多くも中相以降と見られる。これらを型式的に細分する作業は、今後の課題でもある。注目されるのは、9蛭子山、22神明山の巨大前方後円墳からの出土である。甕の型式上からは、前者が古く、後者は新しい様相をもつ。蛭子山の例は、裏陰の一群と近い時期であり、古殿にはこれらより若干古い様相が見られる。第1表を大ざっぱに見れば、与謝・中両郡、つまり、野田川・竹野川流域に甕の分布が集中している

第1表 丹後地域の布留式甕の出土遺跡一覧

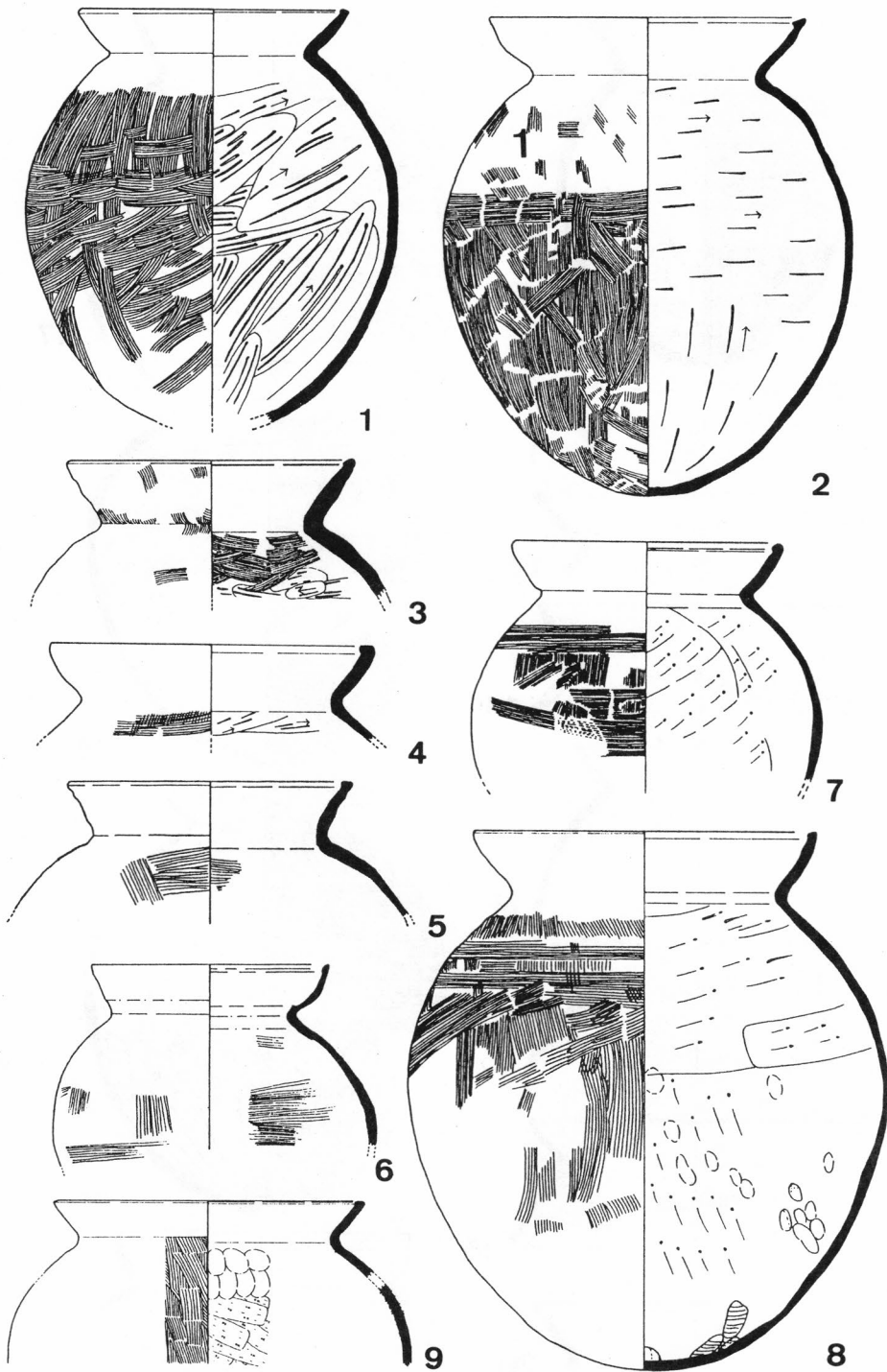
No.	遺跡名称	所在地		出土数	備考	
1	志高遺跡	加佐郡	舞鶴市字志高	多	縄文～奈良時代を中心とする大集落	
2	桑銅上遺跡		舞鶴市字桑銅上	多	弥生中期～奈良時代を中心とする集落、甕は須恵器を供伴する	
3	日置遺跡	与謝郡	宮津市字日置	少	弥生中期～古墳中期の大集落	
4	中野遺跡		宮津市字中野	少	弥生後期～中世にかけての集落	
5	柿ノ木2号墳		宮津市字須津	1	木棺直葬	
6	霧ヶ鼻2号墳		宮津市字須津	2	古墳前期～後期にかけての群集墳	
7	千原遺跡		岩滝町字岩滝	少	弥生中期～平安時代の集落、奈良時代の布目瓦が出土する	
8	寺岡遺跡		野田川町字石川	少	弥生中期～平安時代の集落、弥生中期の墳墓がある	
9	蛭子山古墳		加悦町字明石	1	舟形石棺、竪穴式石室を有する前方後円墳	
10	井前遺跡		加悦町字後野	少	弥生後期～平安時代の集落	
11	温江遺跡		加悦町字温江	少	古墳時代の集落	
12	三重遺跡		中郡	大宮町字三重	少	弥生後期末の集落、擬凹線文土器が主体
13	幾坂遺跡			大宮町字周枳	多	古墳中期の集落
14	裏陰遺跡	大宮町字奥大野		多	縄文～古墳前期を中心とする集落	
15	谷内遺跡	大宮町字谷内		多	縄文早期・弥生後期～平安時代の集落	
16	アバタ遺跡	大宮町字善王寺		少	古墳後期の集落	
17	菅外遺跡	大宮町字善王寺		少	縄文～古墳時代の集落	
18	小池古墳群	大宮町字口大野		2	甕は12・13号土壇墓から出土	
19	古殿遺跡	峰山町字古殿		多	弥生後期～古墳前期、平安～鎌倉時代にかけての集落	
20	奈具岡遺跡	竹野郡		弥栄町字溝谷	多	弥生後期～古墳、平安時代の大集落
21	竹野遺跡		丹後町字竹野	少	弥生前期、古墳～室町時代の集落	
22	神明山古墳		丹後町字竹野	1	前方後円墳	
23	林遺跡		網野町字網野	多	弥生～奈良時代の集落	
24	浦明遺跡	熊野郡	久美浜町字浦明	少	弥生～奈良時代の集落	
25	橋爪遺跡		久美浜町字橋爪	少	弥生中期～古墳時代の集落	
26	権現山古墳		久美浜町字品田	1	竪穴式石室、木棺直葬	
27	クズレ谷遺跡		久美浜町字新庄	少	古墳～奈良時代の集落	

表中No12・22は表面採集資料で、他は発掘調査による資料である。

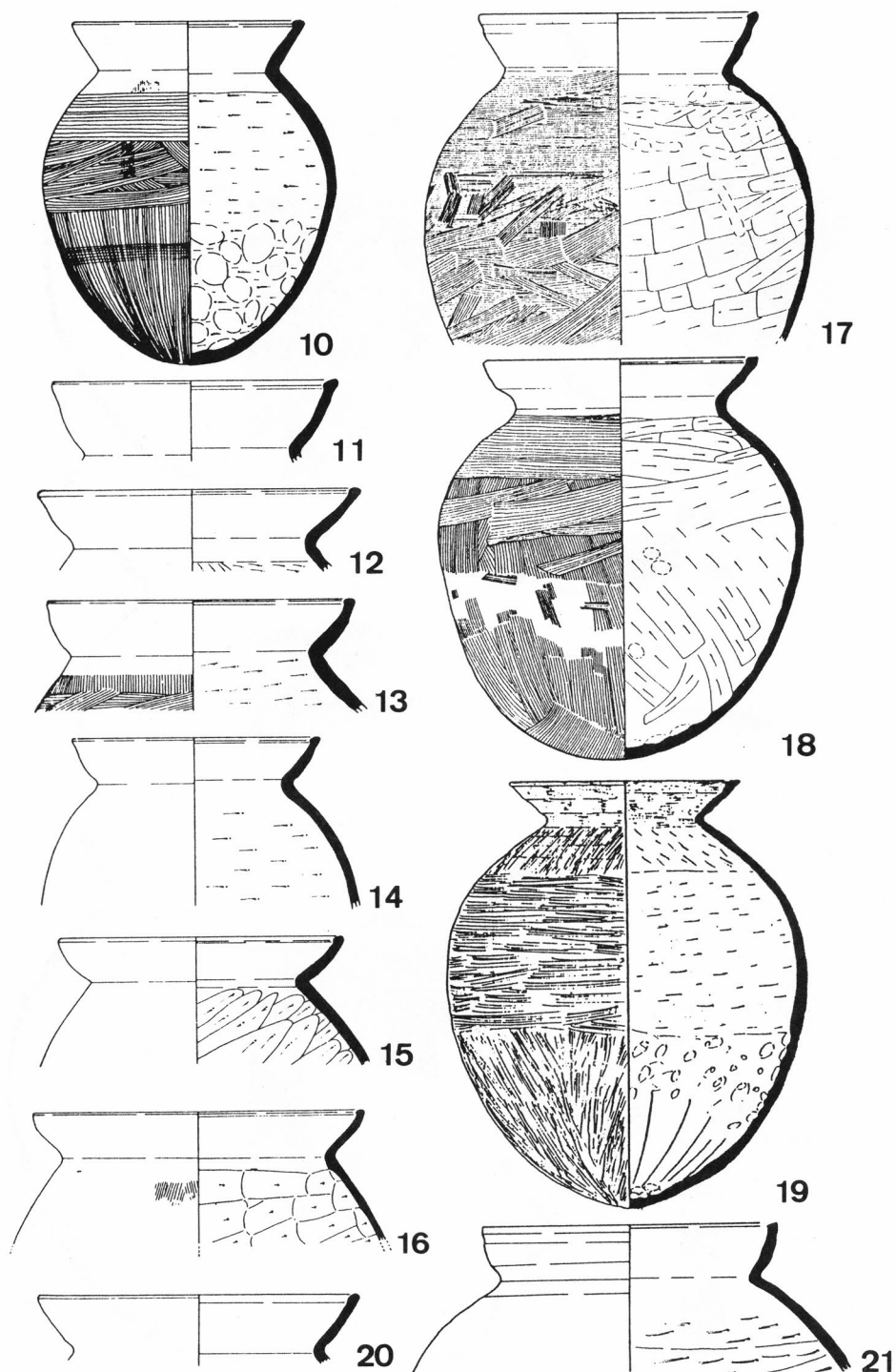
ことが判る点を確認しておきたい。

3 前期古墳と布留式甕の分布

第3図は、布留式甕の分布に、前期型古墳、および中期前半までに築造されたと考えられる前方後円墳を重ねたものである。結論的に言えば、甕と前期型古墳の分布および密集度は一致する。さらに、本図には入っていないが、埴輪を有する古墳(丹後では後期の古墳で埴輪を持つのは5基程度)31基を重ねても、野田川・竹野川流域に集中する。ちなみに、丹後5郡のうち、加佐・熊野両郡には、現在、埴輪の出土例はない。丹後地域において、布留式甕の受容・伝播と古墳の築造を開始する時期との相関関係を考えてみると、布

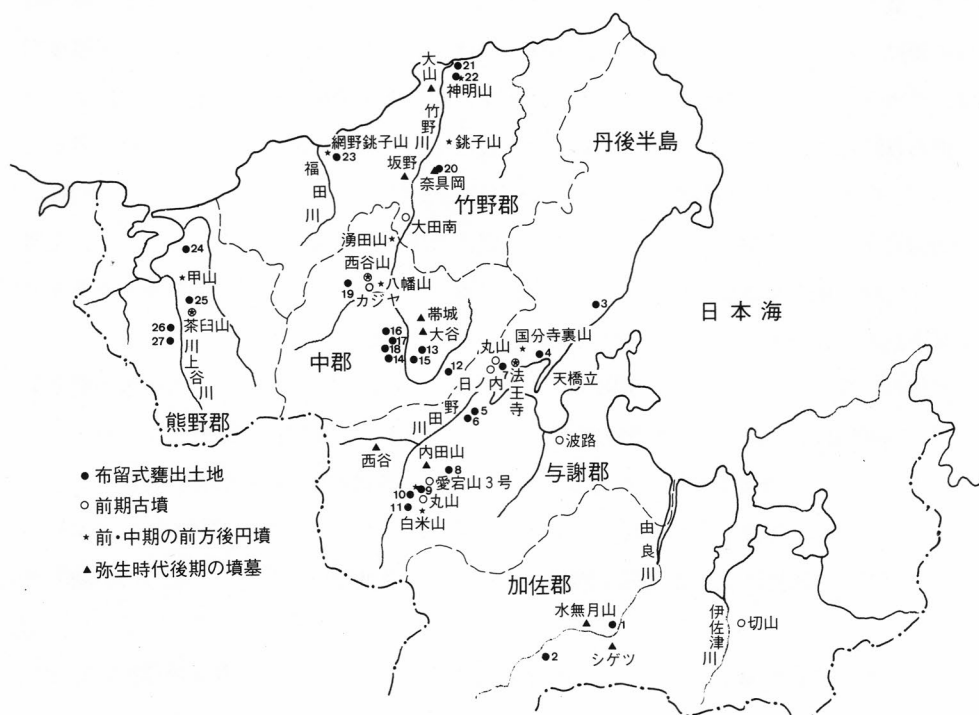


第1図 布留式甕実測図(1) 1/4大(各報告書による)
 1~4. 志高 5・6. 桑飼上 7・8. 霧ヶ鼻 9. 蛭子山



第2図 布留式甕実測図(2) 1/4大(各報告書による)

10~15. 裏陰 16. 小池 17・18. 古殿 19. 神明山 20. 林 21. 権現山



第3図 布留式甕と前期古墳の分布(番号は第1表に一致する)

留式甕(中相)と、葺石、埴輪を有する前期型古墳の築造とがほぼ一致すると言える。とくに埴輪樹立の開始時期と一致するようである。これは、きわめて畿内的な土器である布留式甕の分布が畿内的様相の濃い丹後の古墳の性格を解決するうえでの参考になる。しかし、丹後地域の初期古墳の造営時期と布留式甕の受容は一致しない。宮津市波路古墳、岩滝町丸山古墳、加悦町丸山古墳、峰山町西谷山・杉谷山古墳、弥栄町大田南古墳など、布留式甕の受容以前の古墳も散見するからである。また丹後では、第3図に付加したように弥生時代後期の段階で、玉類、鉄剣、刀子、鉈等をもつ有力な墳墓が野田川・竹野川流域ですでに発生、展開しており、その延長線上で、円墳を主体とした古墳の築造が開始されるといえる。つまり、布留式甕の流入は、古墳の発生よりも一歩遅れるが、その流入と共に大型の前方後円墳・円墳が成立したと考えることができる。

4 おわりに

以上、布留式甕を中心に、古墳、集落との関係を述べたが、何よりも甕自体の特色や胎土、数量分析等が不十分であり、甕の分布を見ての雑感にすぎない。集落跡出土の布留式甕には、山陰地方と共通する壺、甕が大量に伴うことが、当地域では一般的である。丹後

では、甕の内面ヘラ削りは、弥生時代中期に始まり、古墳時代後期まで存在する。弥生時代の甕は、タテまたはナナメに削り、布留式甕は、ほぼ水平に削るのが通常で、古墳後期は、ナナメとヨコ方向の削りが混在する。水平方向に削る手法は布留式甕の流入によるのであろう。なお、土器外面を調整するタタキ技法も畿内から丹後にもたらされたと考えてよいが、丹後では、擬凹線文土器等にのみタタキ目土器が共伴する。このタタキ目土器は、擬凹線文でも弥生後期末の土器に伴うので、畿内の庄内式に併行すると考えてよく、土器のうえでは、絶対量は少ないとはいえ、布留式甕に一步先んじて、畿内の要素であるタタキ目手法が丹後に入っていると考えてよい。

丹後の古墳文化については、解明すべき課題は多いが、ここで取りあげた布留式甕と前期型古墳の頃は、丹後が強大な勢力を保持した時期であり、地理的には野田川・竹野川両流域を中心とする丹後半島域でもある。この半島は、西暦400年前後に有力豪族が築きあげたいわば「丹後王島」とでも言うべき様相を呈していたものと考えられる。なお本稿の執筆に際しては磯野浩光、肥後弘幸両氏から資料等の提供をいただいた。記して感謝したい。

また、第1表及び第1図・第2図に掲げた遺跡については、全て、各々の発掘調査報告書に拠るが、ここでは、省略させていただいた。ほとんどが、ここ10年以内の発掘調査による成果である。各機関担当者に感謝したい。

(すぎはら・かずお=京都府教育庁指導部文化財保護課)

〈主な参考文献〉

- 田中琢「布留式以前」(『考古学研究』12-2) 1964
安達厚三ほか「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』60-2) 1974
置田雅昭「大和における古式土師器の実態—天理市布留遺跡出土資料—」(『古代文化』26-2) 1974
石野博信ほか『纏向』 1976
都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』26-3) 1979 ほか
小山田宏一「布留式成立に関する覚書」(『考古学と古代史』) 1982
井上和人「『布留式』土器の再検討」(『文化財論叢』) 1983
寺沢薫ほか『矢部遺跡』 1986